東北薬科大学 一般教育関係論集10号 別刷（1996）

ドローレス伯爵夫人の貧と富と罪と贖い

貧しい貴族の娘達の歓談に供する教訓的実話

第二部

富

（第八章〜第九章）

ルートヴィヒ・アヒム・フォン・アルニム
著

山下　剛・林　雄作
訳

[翻訳]

ドローレス伯爵夫人の貧と富と罪と贖い

貧しい貴族の娘達の歓談に供する教訓的実話

第二部

富

(第八章～第九章)

ルートヴィヒ・アヒム・フォン・アルニム
著

山下　剛　・　林　雄作
訳

第一部「貧」第一章～第二部「富」第七章　梗概

南ドイツのとある町に住む伯爵令嬢ドローレスとその姉クレーリアは、放縦な父の失踪と母の死により家が没落したため、廃屋同然の城でおりから勃発した戦争を避けて貧窮の生活を送っている。奔放で軽率なドローレスは貧しさに耐えかねて身分違いの結婚すら望むようになり、それをたしなめる聡明で誇り高い姉に強く反撥する。そうするうちに、かつての忠実な老執事からカール伯爵という旅の学生が姉妹に好意を抱いていることが伝えられると、ドローレスはひそかに姉への嫉妬と優越を感じる。伯爵を迎えたドローレスは故意に姉を遠ざけてたちまち伯爵と婚約するが、善良な伯爵はクレーリアとも友情を結び三人で束の間の楽しい時を過ごす。しかし、カールは姉妹への援助で旅費を使い果たしたため、いったん大学に戻り翌春再び彼女達を訪れる。（第一部「貧」第一章～第九章）

一方、ドローレスはクレーリアが伯母のもとで暮らすためにシチリアに旅立つと、昔の仲間と遊びふけって婚約者を忘れてしまう。そこに訪ねてきた伯爵はドローレスの本性を知って失望するが、老執事の取りなしと彼女の魅力に負けて和解し、二人は結婚式を挙げ、伯爵の領地に赴く。ところが、経済的に豊かになっても退屈な田舎暮らしに嫌気がさしたドローレスは、領地経営で不在がちの夫と侘びしい社交生活への不満から、無理を言って気違いイルゼと呼ばれる噂好きで品性下劣な女を侍女にする。その上、隣領地の醜い男爵と諍いを起こし、名誉を汚されたと夫をそそのかして男爵と決闘までさせる。しかし、後に謝罪に訪れた男爵からその友人の商務顧問官ヌーデルフーバーと公子教育係キレを紹介され、失われた世継ぎの公子や失われた世継ぎの公女ヴェンダの物語を二人から聞かされるうち、刺激に飢えた軽薄なドローレスは男爵に好意すら感じるようになる。こうして、ドローレスは夫カールとの間に心の溝を深めていく。（第二部「富」第一章～第七章）

『ドローレス伯爵夫人』全編の章立て

第一部	「貧」	全 9章	(11～47ページ)
第二部	「富」	全31章	(48～235ページ)
第三部	「罪」	全13章	(236～306ページ)
第四部	「贖い」	全16章	(307～513ページ)

（各部のページ数は、ハンザー版アルニム全集の第一巻 „Armut, Reichtum, Schuld und Buße der Gräfin Dolores“ In: Achim von Arnim. Sämtliche Romane und Erzählungen (in drei Bänden). Erster Band. Hrsg. von Walther Migge. 2.Auflage. München: Carl Hanser Verlag 1974. S.11-513 に従って付した。）

目　次

ドローレス伯爵夫人の貧と富と罪と贖い

第　二　部

富

第　八　章　　説教者フランク。
愛における市民と宗教の諸関係についての対話・・・・・87
第　九　章　　ホリンの愛の人生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・96

第　八　章

説教者フランク。[*1]
愛における市民と宗教の諸関係についての対話

実際に食卓が整えられ、スープが運ばれてきていた。伯爵夫人は男爵に至極満足の意を表わした。そして男爵が彼女の手に接吻すると、ちょうどそこへ伯爵が見なれぬ聖職者を連れて入ってきた。伯爵は嫉妬はしなかったが、妻が下劣な人間とこのように親密にするのは嫌だった。伯爵はひどく真面目にその新来の客を近在の説教者フランク師だと彼女に紹介し、こちらは新教の聖職者で、この土地の農業に大いに貢献なさっているのだと言った。この男は近隣では説教の名人としてよく知られており、今回伯爵はこの男を伯爵夫人側の二人の馬鹿げた人物の毒を打ち消すために連れてきたのだった。伯爵夫人はこの男にそっけない挨拶をすると、すぐまた男爵やその仲間の方に向き直ってお愛想を言うのだった。伯爵は男爵をわきに連れていくと、怒気もあらわに、もういい加減に即刻二人の仲間を連れて出ていってもらいたい、と言った。男爵はそれを大声で繰り返して伯爵夫人に聞かせると、こう言った。「さあ、伯爵の剣幕を見てください。きっと、私がすぐ出ていかなかったら、私を階段から突き落とすでしょうよ。まともな頭を持ちながら、されるがままに突き落とされることなどできましょうか。そんなことをされたら、軟膏と膏薬代に少なくとも二三ターレルはかかるでしょうな。それなら、村の居酒屋で昼食代を払うほうがずっといい。食事が済んだらまた参ります。私にはお前らの食事など知ったことじゃないが、お前らは私がまともに話せる相手だ。私と同じ質（たち）の人間だ。もし私の方が間違っていても、この辺り一帯で気が合うのは我々だけなんだからな。」 ― 返事も待たず、彼は両足に竹馬でも履いたように、すたすた歩いて行った。実際彼は二人の間からそび

え立っていたのだが、大いばりで挨拶一つせず部屋を出ていった。

伯爵夫人は、客の前だというのに、伯爵に山ほど非難の言葉を浴びせかけた。この田舎では何とか我慢できる唯一の交際だったのに、それをあなたが腹を立てたばかりに台なしにしてしまったのよ。この辺りで名家とされる貴族の夫人連を一度よく見てみればいいんだわ。誰もかも、ぶくぶく肥って頭が空っぽか、がりがりに痩せて口やかましいかで、惨めこの上ない縄張りの中を走り回っているんじゃなくて、と。伯爵はやり返しはしなかったが、彼女がこんな思い上がった気持ちで、大切な家政の一切を捨てて顧みないことにひどく気分を害した。彼女には、家政の義務を真面目に果たすだけの心構えも手腕もなかったし、家政を維持しようにも、農業経営の細部のすべてについて知識がなかったのだから。見なれぬ男は真面目で口数も少なかった。彼は、今なお青春の魅力とともに目の前に浮かんでいる大学時代のことを、伯爵と二言三言話していた。そして、その時代の風潮から非業の死を遂げた学生ホリンのことを尋ねた。 ― 伯爵は彼に、その学生とは親しい付き合いではなかったものの、自分自身がその場に居合わせたので、実に長い間そのことで深い悲しみにとらわれてきた。気が狂って修道院で死んだ一人の友人から、ホリンが書き残した物をもらい、いまだにそれを聖遺物のように保管している、と言った。 ― 説教者はそれを是非聞かせてほしいと頼み、その若者にはほんとうに心から同情しているのですから、と言った。 ― 伯爵夫人は好奇心をそそられてどんな話かと尋ねた。

伯爵　　：「話し始めたらとても長くなる。食事が済んだら、書かれたものを見ながら詳しく話すとしよう。それは私の部屋にしまってあるのだ。簡単に言うと、彼の不幸は嫉妬の結果なのさ。それ以来、私は決して嫉妬はすまいと決めたのだ。」

伯爵夫人：「そんなの変だわ。嫉妬ほど私達女性の自尊心をくすぐる情熱はないんですもの。」

説教者　：「男性が恋をしている場合、私はそれを許しています。男性の場合にはしかし、それはひどく苦痛を伴うのですよ。」

伯爵　　：「．．．だがむしろ、愛における市民と宗教の諸関係を踏み超えたことで、ホリンの運命は破壊されたのだよ。」

伯爵夫人：「愛における市民の諸関係ですって。」

説教者　：「聖書に書いてあるではありませんか。神は愛なり、愛に生きる者は、神に生きる者なり、※2と。」

伯爵　　：「私にはその意味がわかるし、それを尊重しているよ。その中で君には、ねえドローレス、愛の無限の力と優位が明らかになったのだからね。愛は何のきっかけがなくとも、私達の幸福の基礎を築いてくれたのだ。しかし、先生、神の愛とは人間の人間に対する愛ではないのですか。」

説教者　：「人間の愛における神の愛の浸透という、私の体系の根幹に反駁なさるわけですね。」

伯爵　　：「この浸透の可能性に対して反論しているわけではありません。しかし、私が唯一確実に知っているのは、この神的なものが、人間の愛の中で俗世たる地上の夾雑物から逃れられるのは稀だということです。それは天上の火を真似て人の目を欺くことができますし、今の時代はことのほかそうなのですから。」

伯爵夫人：「あなたが私のせいでその経験をしたのなら私を侮辱することになるわ。あなたが他人のせいでそれがわかったのなら私が嫉妬してもおかしくはないわ。それに、どうして今の時代に腹を立てるの。私達はみなそこで生きているのじゃなくて。」

伯爵　　：「死んだ人達に嫉妬してはいけないよ。私達に生命が芽生える限り、死者達がねたまれる必要はないんだから。君にはしばしば言ってきたことだが、私自身はほとんど経験らしい経験をしてこな

かったし、たいていの経験は他人の寛大さのお陰なのだと思っている。私だって、今の時代を他のどの時代よりも悪いというほど厚かましくはないさ。でもね、今の時代がその前の時代の重い罪を背負っていることは知っているよ。だから、この罪を償うことこそ、この時代の気高い勲功になるんだ。」

説教者　：「そして、まさにそれだからこそ、愛は慰めとしてこの時代に与えられているのです。しかし残念なことに、この時代は愛を信じてはいませんね。」

伯爵夫人：「実際、どうして今の時代が愛など信じられるでしょう。ここに三人の人が集まっただけでも、愛についてはこんなに考えが違っておりますのに。」

―　さて、あらゆる方向から集まった観察をもとにして、ここで一つの概観をまとめてみることにしよう。

今の時代の愛について

今の時代は何と愛に乏しいことか。今の時代は、愛そのものを確信できないのだから。

一人一人の人間が、自分の時代よりも自分を厚く敬い、また時代から逃れるために自分を大いに敬うというわけだ。

しかし、生まれる前に母親を拒否できた者がまだいないように、自分の時代から逃れられる者は一人もいない。

天と地の間の思い上がった孤独な逃亡者に何が残るというのだ。彼は彼自身であり続けることなどできるだろうか。

青春は早くも過ぎ行き、まもなく思い上がった思い出がそれに続く。思い上がった歌を歌いながら、若者は感じた春の花々を受け取る。しかしそのう

ち、歌声は消えて行き、若者の幸福の証人達もしおれてしまう。

君の中の確実なもの、持続するもの、じっと動かずにあるものは何か。

歓喜の苦痛、希望の憧れも、音楽がなお長く余韻を引き、君の夢がめまぐるしく舞ううちに、ついには疲れ果ててしまう。

君に残るものは何か、疲れた魂よ。目の輝き、充溢する思考、間近な喜び、将来への希望はどこに行ってしまったのか。

君には諦めと思い出は残るが、君が君自身でいることはできないのだ。

だから、我々とともに大きくなってなじみ深いその木陰が、そして鳩達がクークーと鳴いて飛び交っているあらゆる茂みが、分別ある男にとって神聖なのは、それらが気づかぬうちに消えて行こうとする青春の思い出だから、というだけの理由ではないのだ。優しい夢は再び彼のもとへ帰りたがり、彼もうだるような夏の暑熱の中で春の輝きを今一度思い出したいと思うからだ。彼はおそらく、これこそ春だと感じると同時に、これは春ではないと感じるだろう。 ― そして美しい秋になり、彼が実をすでに味わってしまったその果樹が新しい花をつけるために彼に目覚め、きらきら光る霜がその樹を繭のように閉じ込めていっそう豊かに花をつけると、彼はきっと一瞬一瞬にこう感じるだろう。死こそ最も豊かな花であると。春であれ、夏であれ、秋であれ、すべては死から生まれることを彼は確信しているのだから。

地に根を張った木でさえ君をこれほど慰めてくれたのに、孤独な人間の君よ、何ゆえに自由な人間達は君を苦しめ、君を非難することしかしないのか。君自身を恐れよ。ほかに君が恐れるべきものは何もない。人間は一人きりでいるのはよくないのだ。[*3] 百合はその気高く白い花頭をもたげるが、百合の花の下に眠る人間の頭は再び起き上がることはない。しかし百合はどれも、別の百合でありながら、前の年に枯れた百合と同じように見える。百合はこれから先も互いに相手を示し合い、互いに入り交じって生き続けるからだ。このように、自分の民族の志操の中で、また自分の民族とともに生き続ける

敬虔な人間は、行為と信仰において彼の父祖達に忠実なのである。彼は死を知らず、死を花の下に隠す必要もないのだ。

愛においても、死においても、君の民族を信頼せよ。これこそが信仰であり、これこそが行為となるのだから。

幸福のさなかに軽率にも自分の民族の信仰を忘れ、苦しい時にその信仰を捨てる者に対して、神は、最後の苦しみの時にその者を忘れ、幸福の時にその者を破滅させ給うであろう。

我々の時代は、我々の民族は、信仰を持っているであろうか。彼らが何の信仰も持たなければ、彼らに禍あれ。しかし、彼らはまだ聖なる書と聖なる慣習を知っている。そこにはこう書かれている。婚姻は誠実に保たるべし。[*4] 神はこれをおかす者を裁き、堕落の果実をもたらさぬよう、その者をその盛りにあって打ち倒し給うなり、と。何人（なんびと）たりとも、神が彼を試し、神はただ一人にてありと言うなかれ。二人が神の御名において集められてあるところ、神はその間におわし給う。[*5] おのれ自身の快楽に誘われるときには、誰もが試されているのだ。[*6]快楽を迎えた後では、それは罪を生み出す。だが罪は、それが犯されてしまえば、死を生み出すのである。

誤ることなかれ、愛する兄弟達よ。

その際、説教こそ最も長かったものの、おしゃべりでは最も口数の少なかったフランクが続けてこう言った。「この歳とこの職に免じて、長広舌をお許しください。伯爵様、貴方が大学に進まれたとき、私はすでに教職に就いておりました。私達は少なくとも十二才は歳が離れております。」 ― 「ですが、肌の色つやといい身のこなしといい、先生はまだ変わらず若々しい。実際の歳よりお若く見えますよ。」と伯爵は言った。 ― 「私達が規則正しく働いている場合は、各年齢があらかじめ密接に関連しているわけではないのです。」と説教者は言った。「たいていはある一定の期間、それはおそらく病気によっ

ても特徴づけられるでしょうが、それを過ぎると、私達は大きな下り坂にさしかかるのです。つまり、秩序立った暮らしをしていると、多くの辛いことが辛くなくなるのです。田舎に暮らすと、全力を振り絞らざるを得ないような苦労はほとんど知らずに済みます。だからこそ、人々の普通の付き合いを妨げてしまう戦争やその他の出来事でもあると、原因不明の病気や死亡事件が多発するわけです。それどころか、正直に申し上げますと、この地方では輪作[*7]を導入し、私も熱心にそれをやっているわけですが、それでさえ相当数の老いた農場主の命を奪ってしまったのです。それでも、農場主は自分の仕事で命を落としたのですから、それが救いといえば救いなのですが。」 ―伯爵夫人は、余計に耕して少しばかり収穫が増えたからといって、それが人間一人の命と引き換えになるかしら、と言って説教者を非難した。彼は、まさにそれによって将来ずっと多くの人間が楽に暮らしていけることを証明することで、この非難を退けた。その間に食卓が片づけられ、伯爵は妻と友人を、城の裏手の気持ちのよい葡萄の木に覆われた園亭に案内した。これは大きな緑の屋根となり、葡萄の蔦がからんだ数本の支柱に支えられて、ちょっとした夏の家となっていた。太陽がぎざぎざのある葉の間から、家の中の小さな葡萄の房を何とも気持ちよく照らしていた。ゆったりした椅子、白樺酒[*8]、ラインワインと砂糖が、召使い達によって運ばれた。伯爵は周り一帯の記念碑を一つ一つ説教者に示し、そのいわれを説明した。伯爵夫人は、いちいち口をはさんでそれを訂正した。伯爵はここで育ちたくさんのことをしていたが、彼女はもうあのイルゼからみんな聞いていたので、伯爵より正確に知っていたのだ。伯爵は口をつぐんだ。すると説教者は伯爵に、食事の席で約束した話をそろそろ聞かせてほしいと頼んだ。伯爵はしばしその場を離れると、今度はさまざまな書類の入った大きな包みを一つ抱えて戻ってきた。伯爵が書類の整理を終える前に、説教者はもったいぶった前置きで静寂を満たした。彼はこれをいつしか諳(そら)んじてしまったもののようであった。

説教者　：「汝ら、親愛にして高く賛美されしミューズの神々の座所よ。[*9] 汝らは黄金の空中楼閣のごとく、時として余が暗く孤独なる牧師館の部屋を照らし、余は輝きの中で目を伏せる。だが、余にはすでに、この自由にして豊かなるいにしえの騎士の館の高みから、汝らを見やることが許されたのだ、汝ら黄金の山々よ。汝らの上でミューズの神々は、誰もが密かに己がわざを思いつつ、アポロンを囲んで竪琴の音に聞き入っている。[*10] ここではすべてがミューズの友たる美の傍にかくも近くにあるように見える。天馬の泉は夕べの光を受けて何と輝くことか。天馬はいななき. . . [*11]」（その瞬間、実際に伯爵の黒馬がいないたが、これは馬が緑の放牧場で昨日のあらゆる疲れをすっかり忘れたからであった。）「昔の悦びを想ってただ一杯酒を飲み、昔の気分に浸ってただ一曲歓喜の歌を歌うだけで、余は再びかつての余に返る。かつての余には、時が至高の明るい空の高みで鳥と同じ翼を持って漂いつつ、静止するかに見えた。余はこれなん酒杯を、ミューズの神々みなの母たる思い出よ、あらゆる内面の生とあらゆる思索の不可思議なる運命の女神よ、汝の健やかなることを祝って飲み干さん。娘を射止めんと欲する者は、母と気を通じねばならぬゆえ。Hの町[*12] で初めてホリンを識った時のことが、何とかくもまざまざと甦ることよ。我らが国王と美しい王妃[*13] の初の来駕を祝わんがため、大学により植物園で催された輝かしい朝の祝宴で、彼は学生の進講者として何と抜きん出ていたことか。その礼儀正しい態度、その深みのある声、完成された男性たるその姿は、あらゆる観衆の心をとらえた。国王夫妻も、彼に謝辞をくだされた。誰しも彼には好意を示さずにおられず、彼の目の奥には何ら悪しき底意などあり得べくもなかった。彼自身は予想だにしなかったが、彼の魂はいわば誰にも見えるガラス張りの家の中で考えていたのだ。そのことを彼の目が同時に実に生き生きと語っていたのである。それゆえ乙女達は、彼が目を向けることがあれば、おおかたは目を伏せた。それより年上で危険のない年齢にある婦人達はみな、彼に向かって親しく笑い

かけた。彼は己が分を守り、彼女らに気を留めることはほとんどなかった。余の方はほどなく、宮廷と女性達のさまざまな華麗さに気もそぞろになった。女性達は、彼女らを生み出した背の高い花々のもとにあるかのごとく、色とりどりの天幕に色とりどりに座し、花々とともに高い木々の下で揺れているかに見えたのである。余もあれこれの挨拶に追われ、常に宮廷に寄せては返す人々が上げる歓声の中で、彼の姿を再び目にすることはなかった。国王は賢明にも町と大学の求めるものを尋ね給い、学生達の繊細なる自尊心と善良かつ自由なる暮らしぶり、芸術と学問と祖国に対する彼らの熱意を称賛された。そして国産の果物と、パイナップルやメロンや無花果といった庭園の異国の果物とが、量と甘さと果汁の多さを競い合った。またワインがたっぷり注がれたので、大地そのものが己に捧げられた供物で芳香を発したほどだった。だが、とりわけてみごとなのは、健気（けなげ）な若者達と乙女らによる歌だった。その合唱は掛け合いとなって大気に溶け込み、これを歓喜で満たした。この歓声の中で会ったのが、余がホリンを目にした最後であった。国王の一行が去ると、余の目には町は死に絶えたかに見えた。なにしろ若者という若者が二人の女官に熱を上げ、二人の言ったこと、二人のしたことは、それがいかに取るに足らぬことでも、余らは互いにこれを真似たものだったから。」

その間に伯爵は全部の書類を整理し終えていた。彼はすぐさま話に題をつけると、余計な前置きなどせずに話し始めた。

第　九　章

ホリンの愛の人生★※14

「ホリンとオドアルドは同じ日にある学校に入り、すぐに仲よくなった。そのため校長は彼らに同じ部屋を割り当て、卒業して大学に入学するまで、二人はそこで共同生活を送るようになった。ホリンの方が年齢、財産、才能においてオドアルドよりも上だった。この優劣の差は昔は普通であって、彼らの友情にひびが入ることはなかった。二人は学校生活で行われることは何でも一緒にやろうとした。二人で一緒に予習をしたり、こっそりジャガイモを焼いて食べたり、けんか相手の他校の生徒達を協力してやっつけたり、派手な一張羅※15を一着こっそり共用して、交代で喜劇を観に行ったり、喫茶店に行ったりした。二人はカストルとポルックス※16のあだ名で学校中に知れわたっていた。オドアルドはそれまで、Gの町※17で医者をしていた貧しい父親のもとで辛い年月を送ってきたが、そのため意識も、注意力も、利発さも余計に身につけていた。彼はそれによってホリンの有能な家庭教師の役割をにない、ホリンの数々の無思慮な行動を引きとめた。それ以外では二人はあらゆるところで実に一心同体で過ごしていたので、教師達は二人の筆跡を区別するのに苦労するほどだった。後見人達がホリンをHの町へ遣り、父親はオドアルドにGの町に戻るように命じた。二人とも互いに相手の決定が変更されることを期待して力を合わせて頑張ったが、この二点は変えられなかった。二人は泣きの涙で別れを惜しんだが、後になって初めて互いに失ったものを感じた。いよいよ別れる段になって、オドアルドが言った。『これが僕らの

★これと同じ話が、書簡体で1802年にゲッティンゲンで刊行されている。本編の物語形式の引用では、いまだに教訓的と思われるところは残しておいた。

別れの時だ。ひょっとしてまた会う時が来るかも知れない。いや、きっと来る。だが、それは僕らが倒れ、二度と起き上がることのない時だろう。』そして、彼は最初の手紙で友人にそのことや、他の多くの悲しいことを思い出させたのである。学校という二人の小さな世界は、二人の背後で、ベンチに彫り付け合った名前に至るまで、まもなく跡形もなく消えてしまっているだろうということを。その際彼は、子供時代に自分は永遠に生きるものと堅く信じていたことや、いちばん気に入っていた遊び相手の犬が朝日の下でぐったりと横たわり、ぴくりとも動かなくなって死んでしまうまでは、ずっとそう思っていたことを思い出した。 ― 彼は大学のことは何も書かなかった。ホリンの方はこれと全く違い、彼が初めて大学を見た時に思ったことを書いた。『何ということだろう。塔の先端がいくつか見え、それが次第に大きくなり、とうとう青春のすばらしい自由の地全体が地平から現われた時、何という感じに襲われたことか。自由を求める心の叫びは、子供の頃からすでに僕を大胆な遊びに駆り立てたものだったが、それがいまだに鳴り響いているのだ。どのような存在も、光と自由を求めて闘っているのではないだろうか。芽や花や雛鳥、それに、物言わぬ魚でさえ、陽光の中でその本来の場を離れて高く伸び上がり、ざわめきながらその表面を超え出て行くのだ。それなのに、真昼の太陽に向かってすっくと立ち、空でも海でもこの地球をすみずみまで巡り歩くことができる僕らが、市民生活の鈍重な小心さで、溢れんばかりに波打つ力と歓喜が広がっていくのを食い止めているとは。馬車は、学校時代に時間が僕らの椅子の上を通って行ったのと同じで、堪えがたいくらいゆっくり進んで行くように思えた。まもなく、騎士の服装に兜と剣を身に着けた一団がやって来て、どこの誰と聞くでもなく親切に僕らを歓迎し、もてなしよろしく食事に招待してくれたあげく、僕らと兄弟の契りを結んだのだ。人間の姿をした者なら誰でも、僕らにとっては兄弟同様ではないだろうか。愛とは自由なものではないだろうか。すべてを愛情深く抱きしめ、自分のう

ちに迎え入れることは、人間の心の最も奥にある衝動ではないだろうか。」
―　彼は次の手紙で、同胞団に迎えられ、剣の腕前は達人級になったと友人に語った。またこれと反対に、哲学のあらゆる深遠さに対する自分の考えを彼らに伝えるのに苦労しているとも書いた。オドアルドは自分の大学についてこう書き送って警告した。「僕には、作り変えられてお決まりになった冗句にいたるまで、この地のありとあらゆることが堪えがたく単調だ。馬鹿げた二三の名前、日常習慣に関係した事柄に対する十ばかりの冗談、彼らを恐れぬ貧しい人々を侮辱する同じやり方、何度も繰り返し語られる昔の武勇伝、それに恥辱を恐れるあまりの真似事の勇気。そんなことは僕にはもうわかってしまった。平凡でない者は気が狂っていると言われ、文学を愛する者は大天才、これまでにない悪戯をすると、あいつは何かを表現しようとしているんだという話になる。社交の場では、無言の虚栄に満ちた追従がまかり通り、あらゆることが生真面目に重々しく行われる。それから少しばかり酒が入ると、連中は粗野になるのだが、連中に言わせるとそれは非凡ということになるのだ。そして、婦人達に聞くに堪えないことを言い始める。すると彼女達は飛び上がらんばかりにうろたえてしまい、自分を侮辱した者どもに家まで送られて帰るのさ。それが済むと今度はけんか沙汰だ。互いに何でも許し合った友人同士でさえけんかを始める始末だ。ありがたいことに、重大な結果になることは稀だがね。勉強の下らなさについては言うべき言葉もないよ。ほとんどの奴らは講義ノートを取るしかすることがないんだからね。」
　ホリンは学生の暮らしに身を投じて大いに楽しんでいたので、あっという間に所属する同胞団の団長に任ぜられた。当時は、同胞団と学生団が大学を二分して激しく争っていた。彼は熱烈に同胞団に組していた。それというのは、彼が学生団で見つけたような分裂の理由が、少なくとも同胞団にはなかったし、この学生団には全学生が入団することができたため、学生団員同士の抗争も必然的に際限なく続くことになっていたからだ。あらゆることが、両

派の決闘で決着をつけられることになっていた。彼はあらゆるもののために闘うつもりだった。そうすることで彼の心は喜びに満たされた。ただ、決闘ではっきり勝負がつかない場合のことが気にかかった。いっそ片手なと片足なとを切り落とされた方が、むしろ彼には好ましかったろう。早朝、彼は決闘が行なわれることになっていた村へ行った。味方と敵方はいつものように決闘とは無関係なことで実に自由に歓談した。彼はとりわけ、G出身のレナルドなる男をひどく気に入っていた。この男はその町に自分を引き留めようとした父親から独立したいがために、別れも告げずにHまで旅をしてきたのだった。この男は目的がないのであけっぴろげで、貧乏がゆえに朗らかで、酒と博打と女に身を任せていた。そして盛んに冗談を飛ばし、特に意識せずとも大胆で、一度も他人を侮辱したことがなく、酒の席ではほとんどいつも仲裁役だった。また誰とでも仲よく付き合い、特に親友というほどの友人はなかったが、実に多くの人々と知り合いになっており、何度となく兄弟の杯を酌み交し、数知れぬほどの別れも経験していた。それで、彼が新しい知人の中に入ると、どんな場合でも十人の古い知人と再び挨拶を交すとか、知らぬ間に旧知の人を見つけ出してしまうほどだった。彼は常にどの記名簿にも自分の名前が載っているが、自分では記名簿を持たないという唯一の男だった。彼は常に記憶すべき出来事に取り巻かれていたが、その一つとして覚えていたためしがなく、彼にとっては過ぎ去った時はすっかり過ぎ去ってしまっていたのである。また他人のしゃれを聞くのは好きで、聞くたびに笑っていたが、彼自身は飲んだ時にしかしゃれを言わなかった。競争をするときは素早かったが、勝つのは稀だった。なにしろ、彼はほとんど人の話をまともに聞いていなかったのだ。賭け事ではついていたが、勝つのは稀だった。なにしろ、彼はつきが落ちたときにしか勝負をしなかったのだ。彼は尻軽女どもにはたいそうもてたが、もう少し上流の女性達とつながりを持とうという気になることは稀だった。階層が下がるほど早くことが決まるので、彼に

はその方が楽しかった。芸術のうちでは、彼は常に演劇の分野で圧倒的な才能を発揮した。いまだにそうであり、かつてもそうだった。それは、彼が最も変わらぬ人間の一人であり、一晩で十種類のワインの杯を重ねても、けろりとしている人間だったからである。これがホリンの決闘の相手になった。両者はまず抱き合い、続いて剣を交えた。レナルドはたちまち深手を負った。ホリンは相手の剣先に飛び込みたいくらいだったが、友人を助けたい一心から馬を駆って町の外科医を呼びに行った。見つけ出した医者は腕が悪く、手術道具があるのでかろうじて外科医を名乗っているだけだった。この医者が到着し、ストーブの傍で半ば火に焼かれ、半ば凍えて横たわっている怪我人から包帯代わりのハンカチをはずし、探り針で傷口をあちこちと調べた時、ホリンは奈落に崩れ落ちようとしている石も同様だった。結局、希望が彼をひしと捕まえ、この希望のせいで彼は打ちのめされずに済んだ。心の高貴な部分は無傷だった。彼は疲れも見せず、寒さの中を幾夜も寝ずに友人の看病をしていたが、まもなく偶然からレナルドの境遇のすべてを知ることになった。彼はレナルドの妹マリアに宛てて、仲違いしているレナルドと父親を彼女の尽力で和解させてほしい、と手紙を書かねばならなかった。そのとき、レナルドは彼に向かって妹をほめ、妹はこの上なく愛らしく善良だと言った。ホリンは女性に対し若さゆえの尊大さを持っていた。彼は女性との付き合いがなかったため、彼女達をほとんど人間と見なしてはいなかったのだ。とりわけ、近代喜劇の二三の場面に描かれた女性達の当世風の習慣に対して、どれにもこれにもはっきりと嫌悪感を抱いていた。彼が愛について知っていたことと言えば、誰もが感じていたことにすぎず、決して彼が個々の女性のうちに見出したものではなかった。レナルドは彼と話しながら、自分にぴったりで大金持ちの女性がいたら、自分は結婚することになるだろうと言った。そうすれば一挙に借金地獄から抜け出られるのだが、と言うのだった。ホリンは、それを忌まわしいことだと思い、そもそも結婚というものがあるから

には、それは愛し合う二人の人間の結び付きであるべきだと主張した。愛はあらゆる献身を伴い、愛の前ではあらゆる外的諸関係は消え去ってしまうはずだ。愛のない献身など猥褻だ。家政という火で愛の松明をともそうとする者は、地獄の劫火のように焼かれるだろう。それに、しばしば義務から行われることさえあるこの不自然な行為からは、男達のありとあらゆる無意味な放埒と、金銭で贖える愛情しか生まれないと彼は言うのだった。」 ―

「その方の言うことは、やはりすべて正しいというわけではありませんわ。」と伯爵夫人は興奮して叫んだ。「おっしゃる通りです。」と説教者は答えた。「愛がどうしても現実の世界を超え出て行けない限り、私は愛が外的諸関係を超えるものだという彼の言い分を認めません。」 ― 「私が言ったのはそんなことではありません。」と伯爵夫人は言った。「でも、持参金だけが目当てで結婚しても、結果的にはとても幸せになった場合があることは、多くの例で知っておりますわ。それに、相愛の仲だってその反対の場合になることも、私はしばしば見てきましたもの。」 ― 「そんなものを見る必要はないさ。」と伯爵はぶつぶつ独り言を言った。

「. . . レナルドの傷が癒えると、ホリンは大勢の学生仲間の付き合いから身を引いて、学業に戻った。他人を教育したいという願いは、まったくといっていいほど失敗に終わった。それもそのはずで、彼は本来の性格からしてあらゆることを性急にやろうとしたのだ。彼は初めて、急に緑を増して行く春の舞台を一人きりになって歩き回り、新しい緑の葉の一枚一枚を堪能した。曲がりくねる小道づたいに歩いてゆき、橋を渡ると島に着いた。彼は孤独の感情に浸りながら、ちびのバイオリン弾きを呼び寄せ、園亭の中に腰を下ろして胡桃を割ったが、たいていは実が入っていなかった。彼の心は満たされていた。するとそこへレナルドが跳びはねながら近づいて来て、今日到着したばかりの妹をすぐここに連れてくると言って、彼を飛び上がるほど驚かせ

た。父親の勘気は解け、ホリンの手紙で家中の者は大喜びで、皆がどうしても彼と知り合いになりたがっているというのである。今はどんな女性とも話せないときっぱり断るホリンの返事も待たず、レナルドはまた跳びはねて行ってしまった。ホリンは腹を立ててテーブルや椅子をひっくり返し、ちび男に猥歌を弾かせると茂みに駆け込んだ。ほどなくレナルドが妹ともう一人の娘を連れて戻ってきた。レナルドは笑いながら、彼の友人はあらゆる女性に対して奇妙な嫌悪感を抱いているのだ、と二人の娘に説明した。二人はそれを聞いていささかむっとした様子だった。ホリンは茂みに隠れてその一部始終を見ていたが、彼の思いをはるかに超えた光景に、彼はもはや嫌うことも、気を落ち着けることもできなかった。その間に二人の姿は消えた。マリアと話すことができるなら、彼はそこでどんな代償でも払っていたことだろう。だが、彼は彼女を侮辱してしまったのだ。いまさら彼女に何と言えただろう。彼女が立ち去ってしばらくしても、その姿はまだはっきりと彼の目の前に浮かんでいた。晩になると彼は彼女の窓の前をうろついた。そして明かりのついた窓のカーテンを通して一つの影が濃く現われているところに、彼女が立っているのだと思った。すると、そこに何か見えるような気がした。

―　翌日、レナルドは妹と父親を伴って旅に出た。いつものことで、彼は誰かにそれを話すのを忘れていた。誰もどこへ行ったのか知らなかった。ホリンはこのだらしなさに腹が立った。それというのは、このように誰にも告げずに出発したのは自分が侮辱したせいだと彼の方でも勝手に誤解していたので、その償いをするまで彼の心は休まらなかったからである。彼は、気晴らしにハールツ山を歩き回ることに決めた。少なくとも、険しい峰々に登ると、自然の雄大な景色の中で自分自身をさらに忘れることはできた。ある日、彼は晩も遅くなってからゴスラルの町に到着した。町の古いたたずまいは彼自身をも古風にした。彼は流れで二分された狭い小路を通り抜け、多彩な木彫の装飾でいっぱいの市庁舎の前や、すばらしい像で飾られた古い教会の前を

通り過ぎた。実に心地よい気分が血管全体にみなぎり、まるで罪を贖って十字軍の遠征から帰ってきたような、明日には幸福の太陽が再び彼に輝きかけてくるような思いがした。宿に着くと彼にオドアルドから陰鬱な手紙が来ていた。オドアルドは『ウェルテルの悩み』※18 にとりつかれていた。オドアルド自身は、破壊的で我と我が身を反芻するこの世の怪物※19 に気づいていなかったが、父親のために引き受けた面倒な医者の仕事が重荷となり、心の中では、世は永遠に空虚で愛もなく喜びもないままに動いていき、あらゆる自然現象は愚かしく倦み疲れさせる戯れにすぎず、常に同じ花と同じ人間とそれらの同じ環境が年月とともに永遠に反復するだけだと感じていた。そのせいで、人は永劫不変に同じ錫占いで※20 、同じ黙示録※21 から予言をすることができるのだとも言っていた。『我々は』と彼は書いていた。『履いた靴が履き潰されるように走らねばならないのだ。そして、履き潰されれば、靴はぼろぼろになってしまう。そこで、新しい靴がまた足を締めつけるわけだ。無限というやつが立っていて、そのうえ遠くから絶望に満ちた声であざ笑うが、我々はその顔をかいま見ることができないのだ。そこで、僕は君の友情のことを考えるんだよ。するとほら、まだちょうど哀れな少年がぼろ服を探していると、目の前で流れがせき止められて、水門が閉ざされた後に川が透き通った水で満たされるみたいに、僕の魂は晴れやかさで満たされるんだ。何とすべてがかくも満ちていると同時に、かくも空虚であることか。かくも親しげで、かつ悲しげなことか。すべては昼でありながら夜なのだ。友情の光の中で我々の頭頂は清澄に輝くが、目はすでに暗い夜の中で悲しんでいる。何千という人間達が、敵対しながら狭いところでひしめき合って暮らしている。心を交し、喜びを生み出す者はわずかだ。運命の強い弓は、人間達を四大陸に放つ。だが、これら放たれた矢が的に命中することのいかに少ないことか。いったい的はあるのだろうか。この動きの世界から逃れ出ることはできないのだろうか。 ― 毎晩、僕は喜びと憧れの気持ちで、ある伯爵夫人の死の

ことを考えている。人の噂ではこうだ。彼女は静かに寝室に向かい、焼身自殺を遂げたのだが、ベッドにもその周りにも焼け焦げひとつ見当たらず、彼女はすっかり灰の山となって見つかったというのだ。」 ― ホリンは昔の級友を元気づけかつ戒めるために、すぐさま返事をしたためた。「君が手紙で書いているのは自殺だ。これだけは信じてくれ給え。たいていの人間は自殺者なのだ。そして君は、強い毒杯をあおって人生に終止符を打つことを軽蔑はするものの、幾千という美しい生の大華の中にどうあっても毒を見つけ出し、それを吸いたがる大勢の人間のうちの一人なのだ。そして、最後には生きようとして我知らずあがき、死の痙攣に襲われ、最後の一息を吸い込み、いまわの際に溜息をつくというのは、そもそも自然を嫌うことであり、自殺者に下された地獄行きの判決ではなかろうか。この惨めな時代が我々を自殺に導いているのだ。おおかたの人間が、自ら手を下すことはなくても、時代に追随し、その中で滅びて行くのだ。勇気を出して、力強く時代の流れに抗して泳いで行こう。あらゆる善き生を救うための闘いに身を挺する者は、自由のために死に、自由の中に生きるのだ。だが、君が陰鬱な時間に狂気に駆られ、他のことは考えられず、どうしてもウェルテルと同じ考えを持ってしまうなら、気分のよい時間に、別の同じような、もっと辛くない、今よりも君に適した仕事をして、それでもって自分を縛り付け給え。今の仕事は、君があれこれ考えて無為で空虚な時間を過ごさぬようにと父上が君に決めたものだが、君はそれに向かないし、これまでだって一度として向いたためしはなかったのだからね。」

書いている最中に彼は隣室の溜息に妨げられた。それがきっかけとなって彼はあらゆる種類の優しい夜の歌を歌い始めた。すると隣室で呼び鈴の音がして女性の声が聞こえた。彼は悪戯心を起こし、ドアに近づくと給仕の声を真似てこう尋ねた。「御用は何でございましょう。」 ― 年老いた女性の声が答えて言った。「お隣りの部屋の殿方に、明日私達が出発するまで夜の音楽

はお控えくださいと申し上げてくださいな。」 ― この悪戯はひどく面白かった。だが、朝になって本物の給仕から隣室の客の名前を聞いて、彼は何と驚いたことか。それはマリア・レナルドとその母親だった。二人は極く早朝に父親とともにブロッケン山まで歩いて出かけていったのだ。給仕が行ってしまうやいなや彼は心中大荒れで、ひどくくやしくて隣室に駆け込み、わずかの間でも彼女がここにいた痕跡を残らず集めようとした。彼女は薄い間仕切り板を隔てて彼と極く間近の所で寝ていたに違いなかった。それは、もう一つのベッドが年配者がよくやるように枕を高く積み重ねてあったからである。彼はそこを離れることができず、彼女を包んでいた幸せ者のベッドの中に飛び込んだ。ベッドにはまだぬくもりがあり、健康の香りがベッド全体に充満し、彼はますます深く羽毛のベッドに身を押しつけた。それがすっぽり彼を覆ってしまうと、彼は幸福感に浸り切った。彼は撥ね起きて身支度を整えると、一行の後を追ってかなり急ぎ足で歩いた。それで三時間後には汗みずくになってやっと追いつくことができた。彼はまず初対面の人間として彼らに近づき、良くも悪くも先入観は与えないつもりだった。しかし彼は美しい地方に来てとても開放的な気分になり、まもなく口を滑らせてしまった。すると彼はいとも優しくマリアに迎えられ、彼女の兄のために行なったあらゆる功績の見返りに花冠をもらった。休憩所に着くと母親は皆の身のまわりの世話をし、マリアは注意深く親しげな問いかけるような眼差しでお茶をいれた。そのあと父親は、植物には何の知識もない妻と植物採集に行った。ホリンはマリアと一緒に谷や丘を越えて行ったが、実に幸福この上ない気持ちだったので、美しい地方のことなど一言も話す余裕がなかった。明るい星空のもと二人はブロッケン山上の新しい建物に着いた。それは山上にかかる月といった風情の建物だったが、そこから何とレナルドが現われ、なみなみと注がれたグラスを持って二人を迎えた。彼は妹と友人をからかった。父親も若さでは息子に引けを取らないことを示して、妻の前でいいところを見せよ

うとした。レナルドは無骨な学生仲間を数人連れ込んだが、この者達はあやうく岩で手足を挫きかけるほど高い長靴履（ちょうか）きといういでたちだった。彼は皆を動かすことを心得ていた。ホリンは彼の妹とダンスをするはめになった。ワルツを踊るときホリンも彼女の美しい背中に手を置いた。するとレナルドはホリンに、催眠術をかけて妹を眠らせてみるように言った。それは父親には大歓迎の実験だった。ホリンは準備に取り掛からねばならなかった。恋人の傍で不思議な血潮の高まりを感じながら、催眠術の不思議な作用を高めようと精神を集中し、触るか触らないかの程度で美女の全身にくまなく術を施した。それはこの世で最も苦痛に溢れた喜びであった。ありふれたことを言うにはあまりに互いをよく知りすぎていて、敢てそれ以上のことをしてはいけないという、許婚の男女の付き合いとほとんどすべて同じだった。 ―　そういえば、私の友人の一人などはかつてこんな状態に置かれて、永遠に微笑んでいたら自分の唇が痛くて仕方がないだろうな、と私に嘆いたことがありましたよ。 ―　さて、ホリンはその後すぐ戸外に走り出たが、その間に顧問官が娘の寝入ったことを科学的に説明していた。彼は出て行き、こけつまろびつしながら魔女の祭壇[※22]を越えて行った。戻ってみると、夜着姿のマリアが、唇がつくほど窓ガラスに身をもたせかけて立っていた。あまりに深く物思いに耽っていたので、彼が外から静かにその窓ガラスに接吻しても彼女は気づかないほどだった。彼はそれから塔の上の学生達のところへ登って行き、酒を飲んでドイツの自由のために万歳を唱えた。[※23]　―　翌日彼は早朝に起き、朝まだきの陽光の中で雲海の間からかすかに姿を現わそうとしている町や丘や川の様子を眺め、周囲にある今やまったく無人で好奇心を満たすだけの場になった多くの家々の礎石を見た。そして、この偉大な自然とその困難を日々の習慣の中に利用してきた民族に思いを巡らし、すべての技がこのように自然を支配するまでに至り得ないものかどうかと自問した。上空に吹く烈風が日の出の間近いことを告げていた。彼が家に近づくと、マリア

がブロッケンの野草の花束を手に家から出てきた。彼は、まさしくこの通りにこれらすべてを、まわりにあるすべてを、別の人生で前もって見たことがあると思った。彼は静かな敬虔さに浸って彼女の前に跪き、無意識のうちに祈った。彼女が彼の額に手を触れると、彼は喜んで勢いよく立ち上がった。太陽が雲海を突き破っていきなり姿を現わすと、世界が二人の眼前で天地創造の清らかさのままに広がっていた。二人が太陽の光から目をそらして後ろを振り向くと、自分達の姿がとてつもなく大きくなって雲の上に見えたので内心深い戦慄を覚えた。コーヒーを飲んでいる間に日の出を見そこなった顧問官と学生達が後からやって来て、皆が話に聞いて知っていた、いわゆるブロッケン山の妖怪[*24]なる大気現象を面白がった。レナルドは雲の上に影絵で滑稽な悲劇の一場面を演じてみせた。 ― まもなくホリンはマリアとさらに親密な仲になるので、それまでの彼女の人となりを表わす話を語る必要があるようだ。かつて彼女ほど従順な娘はいなかった。実際、これ以外の言い方では説明できないのだ。彼女が席につくときは皆の後から座った。彼女が恋するときはまことにへりくだって仕え、恋人のどんなささいな願望でも、熟慮したり顧慮したりせずに叶えてやるのが無上の喜びだった。そのため、すでに彼女の乳母が、お嬢様はこのままではもっとずっと辛い目におあいなさいますよ、と彼女に言っていたほどだった。母親と兄と父親の三人がどんなに争っていようとも、彼女はその三人を同じ従順さで愛していた。彼女は誰にも慰めとなり、誰にも優しく、誰でも助けてやった。皆が一緒にいると彼女は困惑し始めたが、非常に人付き合いの少ない生活が困惑を彼女の心の中に生み出していたのだった。まだ会いもしないうちに、彼女は自分は我らがホリンのものだと感じていた。それ以来彼女は彼にその証を見せようと常に努力したが、やはり叶わぬままだった。彼は、持ち前の内気さのせいで、女性を口説くようなまねは敢てしなかったからである。しかし、彼らは今また一緒に旅を続け、しばしば二人きりになることがあり、一緒に鍾乳洞を潜

り抜けたりして、特に言葉を交さずとも相手の胸中がわかっていたのだ。すべては承知だった。だが、すべては秘密のままにされねばならなかった。定職を持たないホリンは、父親から見れば求婚者に値するはずがなかったからである。まもなく、オドアルドに対する何ら隠し立てのない友情にも、この愛情から秘密が生まれることになった。愛にはより高い数々の秘密があるのだから。マリアはしばらくの間両親とともに、ブランケンブルクにほど近い友人達のもとに滞在することになった。もっと水入らずにマリアと二人きりで会えるように、彼は両親に別れを告げ、よく知られた画家の名をかたって近くの荒れ果てた森番小屋に身をひそめた。最初の夜、彼女と遠く離れて眠った時、彼は一晩中上下反対になって寝ている夢を見た。マリアはしばしば一人で外出したが、これは誰に見咎められることもなかった。上天気が続いたある朝のこと、彼女は馬蹄山に続く道の上で恋人と落ち合った。彼女は彼の胸に飛び込み、彼は彼女にしがみつかれたままになっていた。こうして二人はひそやかに囁き交しながら深いブナの木の茂みを通り抜けて行った。日曜日のことで二人は誰にも会わなかった。突然上空が明るくなったので、二人は歓声を上げながらさらに二足三足歩いて行くと花崗岩の絶壁の突端に出た。岩壁は周りを囲まれた緑の谷間で自由な自然が勢いよく繁茂し花開いているただ中にあり、いくつかの滝で分断され、反対側からは鈍い規則的な金槌の音が聞こえてくるという人間達の堅実な営みの中にあって、険しくそそり立っていた。すると二人は、嫌でたまらない求婚者に追いかけられ、大胆に愛馬を駆って奈落に跳び込んで男の手を逃れた美しい王女[※25]の話を思い出し、胸がいっぱいになった。その馬のひづめの跡はまだ岩に見ることができた。雨のせいですっかりその印象が深くなっていたので、マリアは一粒の涙を流した。彼女も家に帰れば大嫌いな金持ちの求婚者が待っていたが、自分には父と母の願いに逆らう力がないと感じたのである。ホリンはこの時になって初めて、市民の秩序と世間のしきたりの堅固な囲いの中で彼女の美し

い生を食い尽くそうとしているこの人知れぬ悩みを知った。こちらへおいで、と二人の足元で小川のざわめきが暗に呼びかけていた。深く澄んだ谷も、濃い緑も、小鳥達の鳴き声も、それぞれが確信をこめてこう呼んでいた。あらゆる美しさを持ち、あらゆる驚愕の中にある自然に、二人で身を委ねなさい。下のここには、美しい王女が激しい跳躍をした時に、つむりから落ちた黄金の冠があるのです。それは長い間打ち捨てられていましたが、あなた方が見つけることになっているのですよ、と。『降りていくよ。』とホリンは言った。『マリア、もし君がついて来てくれなければ、僕はあそこで独りぼっちのままこの人生を終えるつもりだ。』 ― そして、彼は言った通りに先に立って急いで降り始め、彼女に足場を教えてやった。すると彼女は、若い羚羊（かもしか）が年上の羚羊に従うように、従順かつ忠実に危険を冒しながら彼の後を追ってきた。谷底に降り立つと二人には世界のすべてが違って見えた。ここは楽園で、地上にいるのは自分達二人きりだと思った。二人は、のろ鹿が一匹逃げた後の四阿（あずまや）に横になった。生の囲いが開かれると、彼はミルテの花冠[※26]を見つけてもぎ取り、永遠の契りが結ばれた。二人は一体だった。しかし、この一体であることだけが二人のすべてだった。二人は、自分達がかくも安らかに憩っている世界と、自分達をかくも穏やかに覆ってきたものの今や恐ろしい暗黒となって頭上で嵐を起こし、驟雨を送ってくる天空とを忘れ去った。ホリンは全力を振り絞り、失神寸前の彼女を家まで送り届けた。『愛は永遠に生き続けるのだ。』と彼は別れ際に彼女に叫んだ。彼女は帰宅が遅れたことを容易にこの雷雨のせいにすることができた。彼女はよい天気が続きそうな限りなお何度か彼のもとに戻った。だが、とうとう重苦しい最後の日がやってきた。その日ホリンは彼女にもう一度変わらぬ真心を誓い、市民らしい勤め口を見つけるために真剣に努力すると言った。さて、ホリンが大学に帰りついたのは夜のことだった。谷間に明かりのついた窓がちらほら見え、塊をなす暗い家々から塔が漆黒色に聳え立っていた。水が彼の足元できらきらと

輝き、堰を越えてさらさらと流れていた。片側で歌声が響いていた。深い静寂が全体を支配し、彼のことを考えている者は誰もいなかった。そこで彼は、自分のように生きているわけではない他人でさえなお人生に楽しみを持ち続けられるのだと思うと、背筋が寒くなった。彼は、どうしたら自分があらゆる他の人間達にまさってこの幸福を手に入れられるかと自問した。辺りはすべてひっそりとして音ひとつ聞こえなかった。最前まで競うようにさえずっていた二羽のナイチンゲールも鳴き止んだ。まるで、あの小鳥達はどうしてもすっかり自分達の幸福を言い、伝えることができないため、とうとう歌いすぎて死んでしまったように彼には思われた。 ―　まもなく彼は大学を出て、急いで首都に向かった。はじめは自分で大胆に破った市民の秩序を、今度は自分の方から捜し求めることになり、そこに自分の幸福に対する庇護と生計の道と安寧を見出そうとした。彼は誰からも好かれた。彼の知識はしっかりしたものであると同時に、誰にでも教えることができた。社交という流れがあらゆる方向から彼を捉え、彼もそのひとつひとつの波と戯れた。彼にはすべての波が目新しく、それぞれに親しいものばかりだったからである。

ところで、マリアのお供で彼女の知り合いの娘が一緒に島に行き、そこでホリンが無礼至極に二人を追い払ったことを覚えておいででしょう。名前は伏せるが、この娘は醜い意地の悪い女ながらマリアに信頼されており、首都に滞在して秘密の手紙の取次役をするようにマリアから特に言いつかっていた。彼女はあのことがあった日以来ホリンを嫌っており、今度は下世話な町の噂から、彼があれこれのひどくいかがわしい女達のところに出入りしているとか、あちこちの娘と結婚の約束をしているとかいう話を聞き込んできた。それで、彼女はマリアから来た初めの数通の手紙はどれも手元に留めておき、なにやかやひどく気がかりなことばかり知らせてやったので、マリアは思い切ってまた手紙を書こうという気が起きなくなった。ホリンは悪気やたくらみなど微塵もなく、どんなにひどい仲間と付き合ってもただひたすら彼のマ

リアだけを思っていたので、このように彼女から何の応答もないことに合点がいかなかった。このマリアの女友達は彼女に手紙を届けてくれと彼から何度頼まれてもがんとして断った。とうとう彼はオドアルドに手紙を書き、自分に彼女の様子を知らせてくれるように頼んだ。オドアルドはあれこれ苦心してマリアに会おうとしたが、慎重にこちらの思いを伝えようにもどうしてもよい機会が得られなかった。それで、マリアと裕福な商人との結婚話が破談になったという町の噂話を書き送るしかなかった。同時に、人生の春の一時的な情熱に身を任せて将来全体を台なしにしないようにと友人に警告した。マリアは君の妻になるような人ではなく、君の広い精神はじきに小さな家庭の範囲にとどまる彼女に嫌気がさすだろう。どんな美人でも、ある種の狭隘な精神の持ち主ならば、考えられないほどいやになるものだから、と。 ―ホリンはこの手紙を一笑に付した。マリアのことなら自分の方がよく知っていた。しかし、彼はこの手紙がもとで友人に心を閉ざしてしまった。彼には友人の判断が高慢に思えたのだ。しかし、彼がそんな気持ちを見せてしまったので、友人は彼がなんとか隠そうとしている秘密に気づくことになった。彼は先延ばしにして手紙を出さずにいるうちに大火があり、その時の救助がもとで病気になったので、結局かなり長い間手紙が書けなくなってしまった。ほぼ回復するとすぐ、まずは病が癒えたことを喜んで友人に手紙を書いた。彼は言葉少なにマリアに対して罪を犯したことをほのめかした。次に自分の病気について、とりわけ自分をひどく悩ました重苦しい夢について詳しく語った。『まもなく僕の周りにたくさんの幻像が見えた。』と、彼は書いた。『黒い服を着て王冠をかぶったマリアが泣きながら近づいてくると、温かい手を僕の額にあてた。君は苦痛のあまり僕の足元に倒れてしまった。昔の戦士達が大勢周りに立ち、僕は運んで行かれた。湯潅をする女が僕を扱っていた。錫の把手が付いた黒い棺の中に横たわっている自分の姿が自分の目で見えた。するとまったく不意にこんなことが頭に浮かんだ。しかし僕は確かに

このすべてを見ているのだから、どうして僕が死んでいるはずがあるだろうか、と。生きながら埋葬されることを考えると僕の体に戦慄が走った。僕は周りを囲んで悲しんでいる人々に自分が生きていることを知らせようとした。しかし、片腕すら持ち上げることができず口も閉じたままだったので、僕は動かない目で君達にどうか助けてくれと訴えるだけだった。そこへマリアがやって来て僕のこの目も閉じ、その上に涙をこぼした。僕は彼女の苦痛と、彼女と別れる僕の苦痛を感じた。僕はもはや君達も僕も救い出せなかった。棺の蓋が釘で打ち付けられ、担ぎ手が僕を持ち上げると、学童達がこう唱和した。ああ、何とすばらしく、ああ、何と爽やかなことか、暑い昼が過ぎた、かくも晴れた涼しい夕べは、と。鐘が殷々と鳴り渡り、僕を送ってきた愛する人々の泣き声も響いた。そこで僕は最後の力を振り絞り、君達に僕が生きていることを知らせようとした時に目が覚めて病気が治ったというわけだ。」

―　マリアの女友達はその間に、四六時中彼女を苦しめてばかりいた。マリアは彼女から、彼がさんざん放埒な暮らしをして重病にかかり、ひどく評判の悪い女が看病をしていると聞かされていた。この看病の話は本当だったが、彼はそのお陰で一命をとりとめたのだった。しかし、この看病もよくある善意の結果に過ぎなかった。その善意は唯一称賛に値するものといってよく、ほんの軽い献身の気持ちからそんな心が起きるのである。その女は決して彼と親しい仲だったわけではないが、彼女はこの立派な男が気の毒だったのである。マリアがどれほどひどく愛の天空から突き落とされ、それ以外のあらゆる関係においても女友達の嘘の報告でどれほど不幸になったかについて、これからお話ししよう。それに、マリア自身も知りたくなかったであろうし、世間にはひた隠しにしておきたかったはずのこともお話ししよう。彼女は人気のない山中であのようなすばらしい逢引きを重ねた結果、数か月後には出産という身重の体になってしまい、それがために彼女の心は二重に引き裂かれていたのである。そこへレナルドがとりわけ無理な話を持ち込んで彼女を

苦しめた。彼はちょうど出版されたばかりのシラーの『マリア・ストゥアルト』がたいそう気に入り、父親をすっかり抱き込んでしまったので、この悲劇は母親の誕生日に家で上演されることになり、マリアが主役を演ずるはめになったのだ。彼はホリンに宛てて、君は僕が負傷して寝ている時に君の力の及ぶ限りいつかは僕のために尽力すると約束したね、と書き送った。さてところで、Gの町には、いや世界広しといえども、モルティマー役をやらせたら君の右に出る者はいない、だから、そのために君にここに来てほしいのだ、と。ホリンはこの招きにひどく困惑した。彼はまさしくその日の朝に鉱山官の職を得ていたからであった。彼は今や彼自身の財産を手に入れたので妻一人を養えるようになったのである。彼はすぐレナルドに手紙を出して、必ず行くが、上演するその日にやっと到着するから、と書き送った。誰がこの役をやることになったかは絶対に秘密にしてくれるように、また自分一人で簡単に稽古できる役なので衣装は自分で整えるつもりだ、とも書いた。 ― 彼はオドアルドに生活の道を得たので赴任することになったと知らせ、このことをマリアに伝えてくれるように頼んだ。彼は後の手紙を前の手紙に同封した。 ― レナルドは自分の計画が成功したことに大喜びで肝心の友人宛ての手紙をつい手渡しそこなった。上演の朝になってやっと彼はポケットの中にそれがあるのに気づき、実にしっかりレスター役の稽古に励んでいるオドアルドにそれを手渡した。オドアルドは、受け取った手紙の中にマリア宛ての別の手紙が同封されているのに気がついた。彼は稽古の間にそれを渡そうとしたが機会がなく、後で彼女を訪ねようと思った。

ホリンはその間、はやる気持ちをなんとも抑えきれずに帰り旅を急いでいた。彼がGの宿に着いたのは夜のことだった。彼の願望が達成されるこの地で、彼は初めて優柔不断な気持ちに襲われたような思いがした。それはマリアの沈黙に対する初めての不安であったが、彼は今までそれを彼女の家族の監視が厳しいせいにしていたのだった。彼の手帳にはこう書き留めてあった。

「マリア、僕の腕が君を初めて抱いたとき、自然は僕らの踊りに合わせて陽気な曲を奏でたものだった。花々は君の足元で開き、小鳥たちは甘い響きで君を愛撫した。花は枯れ、小鳥は飛び去り、冷たい秋風は干涸びた木の葉とともに大地のほこりを舞い上げた。まだ踊っている最中から、君の思い出のどんなにかすかな息吹にさえ僕の胸は震え、鼓動する。心の春は消え去っておらず、その花も消えてはいない。君はまだ、こよなく愛しい者よ、昔のように僕を待っていてくれるだろうか。甘やかな愛よ、君が一言でも返事を書いてくれたら、あの頃の形見に樅の葉の一束なりと送ってくれたら、これほど君の近くにいて寂しい思いをせずに済むものを。だが僕はいつだって君の傍にいたのだから、君の沈黙さえ僕には好ましかったのだ。」

稽古が終わってマリアが自分の部屋に戻るとあの意地の悪い女友達から手紙が来ており、そこにはホリンが職を得て近々旅立つと書いてあった。おそらくこの土地から妻を迎えるのだろうが、彼が言い寄っていた娘は多いので、誰がこの幸運を射止めるのかは決めがたい、というのだった。 ― マリアが最初に受けた感情は、これは嘘だというものだった。しかし次に彼女は不安に捉えられ、堅く復讐を誓った。そして、裏切られた愛の激しさで彼女は彼に手紙を書こうと思った。全世界に自分の愛と自分の恥辱を告白しようとしたのだ。その瞬間にホリンが入ってきた。すでに早朝に彼は家の又借りをしている男から一部屋借り受けておいたのであった。 ― 彼は彼女の姿を見ると言葉も忘れてその腕の中に飛び込んだ。彼女は怒りと愛の入り交じった思いでくるりと背を向けると彼から離れた。彼女はそっと彼を押しのけた。このように背を向けられると、彼は無邪気にも神に顔を背けられて劫罰を受けた者達の苦しみを感じた。彼は半ば息が詰まりそうになって叫んだ。「マリア、君は背を向けて僕から離れるんだね。もう僕のものじゃないのかい。たった一言でいいから言ってくれ。一目でいいからこちらを見てくれ。僕らを一つにした愛のすべてにかけて、神聖な誠のすべてにかけて。君は僕のも

のなんだ。」 ― 「誠ですって。愛ですって。」と彼女は叫んだ。「そんなものは過ぎてしまいました。すっかり過ぎてしまったんですわ。どうしてそのように私からその二つを奪い取ることがおできになったのかしら。それに、その後にはそれを世間の晒しものになさったのよ。出ていってください。あなたに近くにいられると永遠に離れているよりも辛いんです。昔のあなたは何て今と違っていたのかしら。何から何まで変わってしまったのね。」 ― 彼に何と言えたろう。世界が異なった言葉を身につけてしまったとか、人々が自身の言葉を忘れてしまったと思う瞬間があるものだ。彼はつかえながら支離滅裂に思い出と至福の言葉を語った。彼女はこのとき初めて、それまで目の中に溢れていた涙を流して言った。「おそらく二人の愛の思い出として私に残るのは苦痛そのものですわ。」 ― このとき彼女の耳に廊下のドアの前を歩く足音がはっきり聞こえた。彼女は叫ぶように言った。「私をそっとしておいて、出ていってください。出ていって。父が来るわ。」彼女は不安に駆られてホリンを押しやったが、それはドアの足音を気にしてというよりは、思わず知らず嫌悪を感じたからだった。 ― 「哀れな女だ。」とホリンはつぶやきながら出ていき、不思議に苦しい夢を見ているような状態のまま一階にある部屋に向かった。その様子は、一撃で打ち倒すはずが気絶させるだけに終わってしまった生贄の動物さながらだった。こうして、彼は茫然と独りぼっちで椅子に座っていた。一方、オドアルドは、足音の主はこの男だったが、慎重にマリアの部屋に近づいて来たものの、真っ暗な廊下で反対側に向かって小走りに行く友人の姿には気がつかないでいたのだった。持参した手紙や知らせは彼女の心に喜びを引き起こしたが、彼女にはどうしてもそれが信じられなかった。彼女はホリンの手紙の結びを大きく声に出して読まずにいられなかった。「僕の人生最上のすばらしい日々に僕の全存在を満たし、君の愛を勝ち得たのと同じ愛の心を君に持ち帰ろう。マリアよ、ハールツの山であっという間に過ぎた一時の思い出が僕の全身を満たしているのだ。まもな

く、愛しい生の奇跡よ、僕は君をかき抱き別の名前で君に接吻するが、君を僕のものとは呼ばない。君は僕を突き返すのだ。さあひどく頑なに反撥してくれ、優しい心よ。王の飾りに君の身を隠すのだ、飾りも衣装もなく最も美しい君よ。僕がよろめかぬように、また、生そのものの歓喜を芸術と自然の二重になった愛の中で皆に見せるために我がものにできるように。君はまだ僕を理解してはいない、人の心を知る者よ。オドアルドが君にすべてを、すべてのことを説明してくれよう。今の僕にはできない。この手は喜びのあまり震えているのだ。九日たったら君のもとへ行く。町の城壁が僕らを包み込むが、臥所（ふしど）がそうするのではない。レナルド嬢は君、僕はホリン氏。明かりがともされ、急に幕が開く。何ゆえに悲しむのか、君マリア・ストゥアルトよ。愛が君に何も教えてくれなかったら、どんな夢も、どんな予感も、君をまばゆい光で包みはしない。救い手が君に近づいている。彼は君のためなら、何と喜んで命を投げ出すつもりか、何と至福に満ちて君とともに生きようとすることか。どのようにして僕にこの目を信じよというのか。ポーレットのしぶとく悪しき甥、モルティマーこそ我がホリンだ。急ぎ行く雲たちよ、空の帆船たちよ、君たちとともにさすらい、君たちとともに帆走するのは誰か。」

このように声を出して読み上げたのは、オドアルドが信頼を得ていたからだった。いつもの控え目なやり方では彼はここまでこぎつけるのは難しかったことだろう。マリアはこのとき、女友達を通じてホリンに関してどんな知らせを受けていたかを彼に語った。また、友人が到着していることも彼に語った。オドアルドはこの到着を喜び、あらゆる聖者にかけて、悪い噂は捏造された中傷で、すべては誤解であり、容易に打ち消されるものだと彼女に断言した。そして、自分は急いでホリンを訪ね、彼をなだめようと言った。喜びが苦しみにとてつもなく大きく入れ替わったので、長い間牢屋に閉じ込められていた人間が解放されて自由な空気に触れたように、彼女は息をすることも、正気を保つこともできなかった。彼女は口がきけなくなり、気を失って

オドアルドの腕に倒れ込んだ。この瞬間ホリンがそっとドアを開けた。彼は話の中の謎めいたところをすっかり解明するため、もう一度あたってみようと決心したのだった。オドアルドは不安になり、彼の美しい重荷を正気に戻そうとおおわらわだった。彼は物音に気がつかなかった。ホリンはぎょっとして、踵を返すと急いで立ち去ったが、戸を閉めずに行ったのでそこから外の空気が流れ込み、気を失っていた彼女は正気に戻った。オドアルドは今度は急いでホリンのすべての手紙を、マリアのところに持ってきた。ホリンはそこに自分と付き合いのある女性のことを実に率直に、偽りなく、無邪気に書いていたので、彼女は心の底から彼の真心を確信した。彼女の喜びは、瀕死の病人が最後になって息を吹き返し、食欲が出たのと同じだった。オドアルドは今度は急いで宿屋という宿屋に飛び込み、友人を探し回った。泊った宿で彼は宿帳に偽名を書いていたし、ご承知のように、彼はすでにその朝から宿を出ていたのである。オドアルドは胸騒ぎがしたが、町中を歩き回っても何の手掛かりも得られなかった。ホリンはどこにも見つからなかったのである。

ホリンはその間に、辺り一帯を遠くまで歩いて行き、くまなくあちらこちらと休める場所を探し回り、そこで書き物をしながら何とか心を落ち着けようとしたようだ。彼はどうすればよかったのだろう。彼の手帳に書き散らされた脈絡のない言葉は、彼が自分の命を断つことができる場所はなかったことを示していた。おそらく彼は教会で連祷を聞いた後で、書き込んだのだろう。「主(キュリエ)よ、我らを憐れみ(エレイソン)給え、キリスト(クリステ)よ、我らを憐れみ(エレイソン)給え、僕は君達を許した、ハレルヤ、慈悲深き神のために。神は蝕みつつある憤怒を食い止め給うたのだ。 ― 情婦め、お前はあれほど軽率に僕と一緒に敬虔な昔からの掟を破ったように、こうもやすやすと他の男ともそんな仲になるのだな。お前が両親を欺いたように、今度は僕を欺いたのだ。 ― こんなふうに君と再会するはめになったとは、オドアルドよ。最愛の友よ、邪悪極まりない敵

よ、君が恥知らずな腕に抱かれていたとは。オドアルドよ、君に罪はないのだ。彼女に抱かれるのは、天に抱かれるよりも豊かなことなのだから。もう一度彼女に会い、彼女を抱きしめてから、山川を越えて遥か、遥か遠くへ行きたい。」

上演の時間が迫り、客が集まった。マリアは何の猜疑心もなく、楽しそうに衣装を着けていた。オドアルドは彼女に自分の懸念を伝えることを避けていた。感動的なシンフォニーが始まったとき、ホリンは人目につかぬよう暗闇にまぎれて借りておいた部屋に戻り、他人の手を借りずに芝居の衣装に着替えた。おそらく彼はこの音楽の間に気を落ち着けようと手帳にこう書き込んだのだろう。「. . . 内面から生まれ、不安な生の苦痛をかき消すとは、何という音なのだろう。決して外界から来る音ではない。死者を悼む音楽だ。はじめに喇叭が響き、その音で偉大なオルガンの霊達が目覚め、教会の四方の壁を途方もない力で震わすと、祈祷を告げる鐘が低く鳴り出すのだ。この中をオーボエとクラリネットが軽やかに響き、バイオリンとシンバルが快活に鳴り渡る。すると、目覚めた最初の人間の心も鳴り響き、唱和のうちに高みに運ばれて漂うが、胸の息は絶えてしまう。あなたは何とまったく独りぼっちで悲しんでおられることか、マリアよ、聖母よ。裏切られた我が息子を。いったいあなたの息子がもはや、あなたが彼を産んだことを悲しむことができないとは。なぜ復活した者の発する光が、この暗い窓から差し込むことがこうも稀なのか。 ― 深い夜の闇がこの地全体を覆っているのだ。 ― そこで、僕は真暗闇の中でかすむ両眼をこすらざるを得ない。するときらめく朝の光が見える。 ― 何と、周りの壁が打ち震え、光線があちこちに漂い、黄金の翼を持った子供達が梯子を下りてくると、天使の群れが親しげにお辞儀をするのが見えるではないか。空気だ、空気が通っている。どの墓も開き、空の青さがマリアの目を貫く。歓喜の震え、至福の生、永遠の光だ。」

レナルドはこの間にどうにもこらえがたい気持ちで、ホリンが来ないかとあらゆる方向に目を配っていたが、幕が上がった時には自分もきちんと配役通りの衣装に着替えていた。

マリアは、自分が演じるストゥアルトの不幸でひどく感動を与えていた。彼女はたいそう落ち着いており、きっとホリンは与えられた役を演じるだろうと思っていた。実際、彼が自分は最も忠実な友人であると彼女に打ち明ける場面で、彼は思いがけなく舞台に登場した。我らの友人は、その雄々しい体躯の美しさと、よく似合った昔風の衣装のせいで引き立ち、観衆全員の注目を集めた。彼が目をぎょろつかせると、それは客席を沸かせる初めての演技として迎えられ、観客は拍手で彼を応援した。するとレナルドは得意げに平土間の客席に飛び込み、自分の茶目っ気に感謝する言葉を身に浴びた。マリアも彼の姿を目にして驚き、この上ない幸福を感じたが、まもなく二人ともそれぞれの役を演じ切るほど十分に平静を取り戻した。彼はこの世ならぬ神聖さで台詞を言い、偉大なる教会の祝祭の気高い影響について語った。ホリンは、もう一度、これを最後に、マリアに会いに来たとしか思えなかった。そして今こそ、無上の美しさ、無上の輝きの中で、芸術の魔力を余すところなく具えた彼女の姿を見た。彼は今初めて、あらゆる点で役柄がぴたりと自分にはまったと感じた。彼はより高い力がこの不可思議な偶然の中に働いていると信じ、その悪しき支配力に身を委ねた。 ― 場面が終わり、彼は姿を消した。オドアルドは彼の後を追おうとしたが、レナルドが立ちはだかってそれを妨げた。それは、ホリンが彼に手紙で、芝居の間は誰にも自分に話しかけさせないでくれと頼んでいたからである。大急ぎで役を覚えたため繰り返し稽古をする必要があるので、休憩時間はすべて使いたいから、ということだった。 ― 彼はこの幕間に、次の言葉を手帳に書き込んだものと思われる。『僕の目の前でよくもそんなに落ち着き、神聖に、悲しげにふるまえるものだな、マリアよ、僕の目が怖くはないのか。 ― 君は人生にあって

も観客に演技をしてみせているのだ。 ―　君の目を見ていると僕はこんなに胸が痛み不安になった。天使も悪魔もすべて、君から解き放たれて僕の周りに押し寄せ、僕を捕らえてしまうようだ。愛と復讐が追いすがり、絶対の力が僕を引きさらって行く。死によって愛が報われるものならば、愛は死の中に宿っていることになる。 ―　星々は永遠の夜の中を巡り、止まることなく押し進み、狭い空間の中を漂う。生は闘い、生の中で燃え尽きる。まもなく舞台は溢れ、誰しも多くの輝きを喜ぶ。東から西に向かうその一つの軌道を、誰もが駆け抜けようとする。皆は息が詰まりそうになる。 ―　こうなると、己が軌道を彼らの軌道に結び付けた英雄の心臓は絶望のあまり破れてしまう。よし、それなら、僕は英雄ではないが英雄として死のう。ここでは他に捧げるものはないのだから、我が身を犠牲にしよう。永遠に君達とお別れさせてもらおう。もう一度その裾に、お前の月であるマリアの周りを青い色がちらちらと取り巻いている輝く衣装の裾に、接吻しよう。もう一度我が身を、これほど長い間僕を取り囲んできた鎖の輪に結び付けてみよう。輪がはじけ飛ぶ。芸術好きな友人達の大きな拍手が鳴り響く。絶望が僕をむんずとつかみ、憤怒が僕を鞭打ちながら海の流れの中を引きずって行く。そら、芸術よ、お前の勝ちだ。今や北風が荒涼とした岩の先端に僕を投げつけるところだ。僕は縛られたまま転がされ、何をつかむこともできない。僕の頭上で冷たい朝霧がほのかに光り、あらゆる形姿が遠く離れている。僕はなおも愛に満ちて雲の姿に名前をつけよう。真黒な腕と友情の誓いを結べ。その黒い輪は風という風に立ち向かい敢然と闘うのだ。そうすれば、僕はもうそれを、失われた輪を、再び見つけ出すものと思うのだ。それをつかもうと両腕を伸ばすと、輪は、ぎざぎざにうねる蛇のような稲妻を僕をめがけて投げ下ろす。僕はもはや生きておらず、岩の間にこだまが響くだけだ。死によって愛が報われるものならば、愛は死の中に宿っているのだろう. . . 』」

「そこは理解できませんわ。」と伯爵夫人は語り手をさえぎって言った。伯爵は今日は何から何まで腹を立てずにいられなかった。無神経に話の腰を折られるのもそうだった。「実に明らかじゃないか。彼は、命取りになる黒い雷雨の輪という表現で、新しい不純な結び付きを知らせているんだ。それが、彼とマリアの間で芝居として演じられるわけだよ。

. . . 覚えているだろうが、モルティマーはマリア・ストゥアルトに対する愛において、レスターという、幸福ではあるが惨めな恋敵がいて、それをオドアルドが演じていた。レスターはマリアの命を救いたいと願うが、自分自身を犠牲にすることはしない。彼は、モルティマーがマリアの様子を探っているのではないか、モルティマーが自分を探っているのではないか、と疑っている。腹の探り合いに満ちた会談を、ホリンは辛い気持ちを持たずには演じられなかった。オドアルドは胸が締めつけられたが、それが何故なのか分からなかった。彼がもっと堅く決心していたら、ホリンが部屋でこう書いていたその時に訪ねて行っただろうに。『神が、君達の愛するすべてをもって、君達を祝福し給わんことを。君達に己が過ちが見えないよう、決して君達に啓示をお与えになりませんことを。未来永劫に僕を思い出すことがないよう、君達をお守りくださらんことを。』

いよいよ、興奮に満ちた劇の第三幕が、あらゆる美しさとともに始まった。マリアの演技は皆の期待を凌いだ。エリザベトとの不幸な会見の後、我らがモルティマーが激烈な調子を帯びて登場した。こう叫んだ時、彼は生と格闘しているようだった。

この身にとって、貴方と我が恋に比べれば、あらゆる
命など何ほどのことがありましょう。貴方を思い切る
くらいなら、いっそこの世の終わりが来た方がましと

いうものです。[※27]

マリアは、まるで自分自身の魂から叫ぶように言った。『まあ、貴方、何という言葉です。それに、何という目つきを。』[※28]　―　そして彼が抱こうとすると、彼女はそれを押しのけた。その様子は圧倒的に真に迫り、また魅力的でもあった。二人を隔てていた肘掛け椅子を、彼は何という力で書割の中へ放り込んだことか。恐ろしく真に迫ったこのような演技に比べれば、それ以外の演技術などどれも問題にならない。皆が胸を締めつけられ、何か身の毛のよだつようなことが起こるような気がした。誰も敢えて隣の人に話しかけようとはしなかった。誰の胸も鼓動が早まった。マリアは、芝居の中で愛に溢れた最初の接吻を再び贈られたので、自分がひどく朗らかに役を演じているのを感じていた。最終幕までの幕間に、ホリンは書割の中のかなり離れたところに立ったままだったので、誰も彼と話すことができなかった。さて、彼とレスターの会見の段になった。レスターの恐ろしい裏切りの場面である。彼の高貴な心は否応なく皆の心情を彼に引きつけた。ホリンは自分を捕縛しようとする警士に向かい、何という軽蔑の念をあらわにして言ったことか。『何をするか貴様、暴君にへつらう奴隷めが。この見下げ果てた奴め。俺は自由の身だ。』[※29]彼は襲いかかる者たちを実にみごとにかわし、こう叫んだ。『愛する方よ、私は貴方をお救い申すことができないのですから、こうして貴方に男子たる者の手本をご覧にいれましょうぞ。マリアよ、聖母よ、私のためにお取りなしください。そして、貴方の御許へ、天の国へとお連れください。』[※30]　―　こう言いながらモルティマーは我が身に短刀を突き刺した。―　観客全員が割れんばかりに拍手をして喝采を送った。すると彼を抱き起こそうとした警士役の一人が声を上げた。『なんと、苦しがって痙攣しているぞ。それに血だらけだ。』皆は恐怖に襲われ、体から力が抜けていった。マリアだけはすべては錯覚に過ぎないと呑気に考えていたので、思い切って

そちらに目を向けてみた。ホリンは彼女に傍に来るようにと目配せし、しっかりした口調で言った。「僕の命はあとわずかだ。人目を欺く芸術が僕を奪い去ったのだ。オドアルドが君の面倒を見てくれるだろう。彼に忠実でい給え。」 ― オドアルドは、ホリンがこう言いながら傷口から引き抜こうとした短刀を、しっかり押さえていた。彼は腕のいい外科医だったので、短刀を抜いた瞬間にホリンが死ぬことが分かっていたのである。この時、誰が友人として彼の苦しみを感じたいと思うだろうか。人というものはほとんど自分自身の共感の強さを恐れるものだから。マリアははじめ失神して彼の傍に倒れ伏したが、正気を取り戻した。彼女は彼に哀願し、お腹にいる彼の子供のために生きて欲しいと言った。傷は深くは見えなかった。彼を混乱に陥れた恐るべき錯誤の全貌が明らかになった。彼の愛と友情は再び彼がすでにそれらを追放していた永遠の世界から戻って来た。彼は幕を下ろさせ、近しい者以外は遠ざけさせると、市民の秩序と神の定めの神聖な法を軽率に踏みにじったことについてマリアの父親に許しを乞うた。彼は、マリアとその子供のために死後も二人の行く末を喜び、自分の財産は確実に二人のものにしたいと言った。聖職者が、いささかためらいがないわけではなかったが、彼と意識を失っているマリアを簡単な言葉で結婚させた。「神の合わせ給いしものは、人これを離すべからず。」 ― 「アーメン。」と皆が言った。しかし、ホリンは声を上げた。「僕はやはりこうしてしまった。オドアルドよ、気高い友よ、彼女の面倒を見てくれ ― 愛の生は ― 永遠なのだ。」彼はこう言って短刀を傷口から引き抜いた。血が勢いよくほとばしり、頭をうなだれると彼は息絶えた。

マリアは、言いようのない苦痛で恐ろしく無感覚になりながら、彼の両目を閉じてやった。オドアルドは力ずくで彼女を亡骸から引き離さねばならなかった。彼は友人のために教会の塀の外側の細かい砂地に墓を掘ってやった。マリアは一週間後、早産で子供とともに死んだ。彼は、彼女も教会の塀の外

側で彼の傍に葬ってやった。子供は二人の間に葬り、いっぱいの薔薇の花と二人の愛の思い出となるその他の品々を供えた。彼は友人の愛したものをすべて埋葬してしまうと、修道院に入った。彼の悪しき運命は彼とともに入ってくることはなかった。彼は記憶も思い出も失い、子供のように陽気になり、まるで違う世界の話ででもあるかのように、しばしば友人の手紙を読んでは微笑んでいた。』」

伯爵の話の最後の言葉が終わると、説教者は立ち上がって、広い通路を下りながらゆっくり離れていった。伯爵夫人は目で彼のあとを追い、笑いながら尋ねた。「そのオドアルドっていう人は、きっとあの方ご自身のことじゃありませんの。」 ― 「苦痛には敬意を払うものだよ。」と伯爵は答えた。 ― 「今日はどうしてあなたがそんなふうに私にあたるのか、訳が分かりませんわ。」と伯爵夫人は言った。「いつもとまったく様子が違うんですもの。私は根が陽気なものですから、やり切れない悲しいことは何でも嫌いなんです。ホリンという方が亡くなったのは、気の毒だと思いますわ。救えるものなら、私だってそうしてあげるでしょうよ。でも、この美しい午後を、その方のことで台なしにされたくはありませんわ。」 ― 伯爵は説教者のあとを追いかけ、すぐにすっかり落ち着き冷静になって彼を連れて戻って来た。伯爵夫人は彼に尋ねて、それほどはっきり結婚というものが大切だというからには、おそらく貴方は実に幸せな結婚をしているに違いない、と言った。 ― 「結婚はしておりません。」と彼は答えた。「しかし婚約はしております。ですが、結婚するまであと六年待たなければならないのです。それからさらにどうなるかは誰にも分かりません。私の人生は一風変わっておりますが、非難されるような覚えはありません。十歳になる貧しい職人の娘が、まだ家庭教師をしていた私の心をすっかり捕らえたのです。彼女はまだ全然それに気づいていません。彼女は私を恩人として敬っておりますが、愛らしい意味ありげな顔をうつむけてしばしば恭しく私の手に接吻することがあり、その間は私の

全存在が彼女に支配されてしまうのです。私はやっとの思いで自制しています。確かに、私がこの愛らしい娘に対して好意を持たなくなることなど決してないでしょう。年頃になって彼女が私を選ぶか他の男を選ぶかは、彼女に任せればよいことです。彼女の気持ちは、彼女自身が自由に説明すればよいのです。私がそれを非難して彼女をどうこうすることなど決してありません。こう確信しておりますので、私は自分の思いを打ち明けることにためらいはありません。ただ、他人に対してその思いを隠せば、それは罪を犯すことになるでしょうが。」 ― 「しかし、先生、そんなに長いこと独り身でいて、子供をもうける望みを先延ばしにしていて辛くはありませんか。」と伯爵は尋ねた。 ― 「伯爵様、私の牧師館から、カトリックの司祭の、つまり貴方の説教者の住居が見えるのです。その男は一生涯あらゆる喜びを諦めることができたので、聖なるご意志に沿えると思っているのです。私なら六年だって捧げられはしないでしょうがね。人間は、我々のような柔弱な時代の人間には不可能に見えることでも、非常に多くのことができるのです。戦争はかなり多くの人々にこの真実を示しました。また、インドに関する知識[*31]が今は非常に広く行き渡っていますので、聖なる義務に向かうためにはあらゆる力を捧げることができるのだということも、同じく証明できるのです。私は子供に事欠くことはありません。善き掟を破らずとも私にはたくさんの子供がいるのです。私には不可思議な力が与えられていまして、それは私も十分に承知しております。幸せな結婚生活を送っているが子供には恵まれないという人々に会ったとき、私はその夫人達をじっと見つめ、彼女達に子供を授けてやるのです。この効果は私の心中ではなんら罪ではないのです。いや、たいていはまったく意識せずにこの精神的浸透作用が起こるのです。お笑いくださいますな、奥様。貴方ご自身だって、私にその証拠をお見せくださることにならないとは限りませんよ。」 ― 伯爵はこの冗談を必ずしも心地よくは思わなかった。これと反対に、伯爵夫人はこのような精神的な眼差しが

きっかけになっているかも知れない似たような、奇妙なあれこれの例に話題をそらし、見聞きしたことを面白おかしく話し始めた。彼女は、しばしばまさに驚くほど突然に生じる情熱と友情を、このような精神的親縁性から説明した。説教者は彼女の説明をもっともだと言った。そしてさらに付け加えて、汚れを知らぬままに年を経たこの同じ愛と、たとえホリンの無思慮を責めようとも、彼の運命を知ればきっと誰の心にも目覚めるはずの彼を救ってやりたいというこの願望とは、まさしくこの点において深く人の心を捉えるのだ、と言った。また、非常に稀な場合ではあるが、この同じ汚れのなさどうしが出会うと実に朗らかなものになる、とも言った。たいていの恋愛では、精神的な親縁性は自然の求めるところとまったくかけ離れており、それは思い違いの中でしか結び付こうとしないのである。 ― 「たくさん珍しい経験をなさったようですわね。今までこうしてざっくばらんに伺ってきたんですもの、そのことをもっと話してくださいな。そうしたら、今晩一晩中もうお喋りなんかしませんわ。カールがさっき話した恋愛事件はあまり深刻過ぎるんですもの。貴方ご自身の人生から何か愉快なお話をして、さっきの話の埋め合わせをしてくださらなければいけませんわ。」

（第二部　第八章～第九章）

注

※1　説教者フランク

フランクという名前は、この人物が無神論者であることを暗示する。この人物のモデルはスイスの牧師で骨相学者であったヨハン・カスパール・ラーヴァター（1741－1801）並びにダルムシュタットとベルリンで公子教育係をしていたミヒャエル・フランツ・ロイクセンリング（1746－1827）である。アルニムはすでに子供の頃後者について聞いていた。なぜならこの人物は1784年から85年にかけてアルニムの伯父であるシュリッツ伯爵のもとで家庭教師をしていたからである。アルニムは1803年にパリのドロテーア・シュレーゲルのサロンで彼と知り合っている。ロイクセンリングは当時すでに人生に失望し諦念を抱いていた。彼はフランス革命に熱狂し1792年にプロイセンを追放され、同年のうちにパリでフランス国民議会の書記官になっている。プロイセンの若い女官フォン・ビーレフェルト嬢（小説ではレオーネ）がロイクセンリングについてパリへやって来る。二人は結婚するが、失敗に終わる。彼女は夫が抱く革命の考えに背を向け、カトリックに改宗する。若き日のゲーテは『ブライ師の謝肉祭劇』（1774）の中でロイクセンリングを「にせ預言者」と述べて嘲っている。また、この人物はゲーテの『プルンダースヴァイレルンの緑日』（1774）のエステル劇に登場するマルドハーイのモデルともなっている。カルル・アウグスト・ファルンハーゲン・フォン・エンゼは『回顧録と小文集』（1843）の第4巻で、フランクとはロイクセンリングのことを指しているのだと初めて指摘している。

※2　神は愛なり・・・

「ヨハネの手紙1」第4章16節参照。アルニムは聖書のこの部分を後になってから ― この本が再版される場合には ― 彼の処女長編小説である『ホリンの愛の人生』の題字にしようと計画していた。

※3　人間は一人きりでいるのはよくないのだ

「創世記」第2章18節参照。

※4　婚姻は誠実に保たるべし

「ヘブライ人への手紙」第13章4節参照。

※5　二人が神の御名において集められてあるところ・・・

「マタイによる福音書」第18章20節参照。

※6　誰もが試されているのだ

「ヤコブの手紙」第1章14節－16節参照。

※7　輪作

穀物の収穫量を高めるため、同一の土地を畑と牧草地とに交互に使用するいわゆる穀草式耕地法のこと。

※8　白樺酒

白樺の春の樹液から作られる酒。4月に幹の南面に穴を空け、流れ出た樹液を醗酵させる。

※9　ミューズの神々の座所よ

ギリシア神話では本来メレテー（熟考）、ムネメー（記憶）、アオイデー（歌）という3人のミューズが知られていた。すでにヘシオドスは彼らを9人とし、これが正規と考えられるにいたった。その9人とは、クレイオー、エウテルペー、タレイア、メルポメネー、テルプシコラー、エラトー、ポリュヒュムニアー、ウーラニアー、カリオペーである。彼らが好んだ居所はヘリコーン山であり、パルナッソス山であった。

※10　アポロンを囲んで竪琴の音に・・・

アポロンはミューズ（ムーサ）の師であり指導者。それゆえムーサゲテースと呼ばれた。

※11　天馬の泉は・・・天馬はいななき・・・

天馬とはペガソスのこと。ポセイドンとメドゥーサの血を引く有翼の神馬。ペルセウスがメドゥーサの首を切り落とした時、その頸から生まれた。ひづめを打ちつけたことによってコリントス近郊のボイオティエーンとペイレネーにヒッポクレーネ（天馬の泉）が湧き出した。天馬の泉がミューズの山であるヘリコーン山にあるため、近代になってペガソスは詩人の馬と考えられるようになった。

※ 12　Hの町

大学町ハレのことであろう。アルニムはこの地で1798年から99年にかけて法学、物理学、数学、化学を学んだ。

※ 13　我らが国王と美しい王妃

アルニムが学生としてハレに滞在していた時、プロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム3世（1770－1840）と王妃ルイーゼ（1776－1810）の来駕があった。町と大学は1799年7月4日に国王夫妻のために植物園で歓迎の祝宴を催した。

※ 14　ホリンの愛の人生

以下の部分については書簡体小説『ホリンの愛の人生』に詳細な注がある。この作品の本文と注は、以下の全集版の9-99ページおよび717-732ページを見られたい。

Achim von Arnim, Werke in sechs Bänden, Band I. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1989

※ 15　派手な一張羅

学生であることを証明するぜいたくな外出着の意。

※ 16　カストルとポルックス

カストールとポリュデウケースはゼウスとレーダの双子の息子であり、引き離すことはできないと考えられている。不死の神としてオリュムポス山に受け入れられる時、ポリュデウケースはゼウスに、死すべき人間である兄弟カストールと一緒に地上に留まる許可を求める。その結果二人は1日交代でオリュムポス山と下界で過ごすようになる。彼らは二人の若者間の友情の象徴となった。

※ 17　Gの町

大学町ゲッティンゲンのことであろう。アルニムは1800年5月に数学専攻の学生として入学を許可された。

※ 18　『ウェルテルの悩み』

ゲーテの『若きウェルテルの悩み』は1774年に出版されていた。

※ 19　反芻する・・・怪物

ゲーテの『ウェルテル』第1部、8月18日の日記には次のように記されている。「天と地、そして僕を取り巻いて動くそれらの力。僕には永遠に呑み込み、永遠に反芻

し続ける怪物の他は何も見えない。」

※ 20　同じ錫占いで

広く信じられていた迷信によると、錫を流し込んだ時にできる形から未来を読み取ることができるという。錬金術師は錫を「金属の悪魔 (Diabolus metallorum)」と名づけた。大晦日に錫を流し込むことがアルニムの長編小説『王冠の守護者達』のまさに冒頭部で一つの役割を演じている。

※ 21　黙示録

たいていは新約聖書のヨハネによるものをいう。特に、間近に迫った世界の終わりを描写しているユダヤ教と初期キリスト教の預言書のことを、黙示文学という。

※ 22　魔女の祭壇

ブロッケン山の頂上に二三の花崗岩の塊があり、魔女の祭壇とか悪魔の説教壇といった名前がつけられた。ブロッケン山はドイツの伝説の世界で重要な役割を演じている。ハールツ地方がキリスト教化された後も、ブロッケンの丘ではなお長い間、古い神々に密かに犠牲が捧げられていた。とりわけ、古い信仰の最大の祭日である５月１日（ヴァルプルギス）にはここでなおも異教の祭式が執り行われ、キリスト教の聖職者達はこれと激しく戦った。ここからヴァルプルギスの夜にブロッケン山で魔女や悪魔が馬鹿騒ぎをするという伝説が生まれた。

※ 23　ドイツの自由のために・・・

ナポレオン時代に学生達によって行われた愛国心の表明行為。ハールツ地方は『ドローレス』執筆当時はヴェストファーレン王国の一部であり、フランスの直接的な勢力範囲に属していた。

※ 24　ブロッケン山の妖怪

太陽が下方にあるときに霧の壁に投影された観察者自身の巨大な影のこと。1780 年にブロッケン山で観察されたので、この名がついた。

※ 25　美しい王女

美しい王女の乗った馬のひづめの跡が馬蹄山の上面に窪みとなって残っており、馬のひづめの巨大な刻印といった形をしている。この岩にまつわる伝説には、巨人に追いかけられた王女が馬を駆ってこの岩から跳躍をし、その時に馬のひづめがあの

跡を残したと語られている。

※26　ミルテの花冠

古代ギリシアでは常緑樹であるミルテはアプロディーテに捧げられていた。結婚式ではかつて花嫁はミルテの花冠で飾られたものであった。

※27　この身にとって・・・

「マリア・ストゥアルト」第3幕6場参照。

※28　まあ、貴方・・・

「マリア・ストゥアルト」第3幕6場参照。

※29　何をするか貴様・・・奴隷めが・・・

「マリア・ストゥアルト」第4幕4場参照。

※30　マリアよ、聖母よ、私のためにお取りなしください・・・

「マリア・ストゥアルト」第4幕4場参照。

※31　インドに関する知識

ロマン主義者達が抱くインドの言語や文化に対する強い関心を暗示している。インド研究は当時のドイツでは、特に1808年に出版されたフリードリヒ・シュレーゲルの研究「インド人の言語と知恵について」によって活気づいた。アルニムは「隠者新聞」の2号（1808年4月6日、9、10段）、3号（1808年4月9日、17、18段）、7号（1808年4月23日、53、54段）でシュレーゲルの著作の見本を印刷した。そのためにバッゲゼンの「クリングクリンゲル年鑑」で「アルニムとゲレスはインド米を食べている。」と嘲られた。

（付記）

本書は、ドイツ・ロマン派の作家ルートヴィヒ・アヒム・フォン・アルニム（Ludwig Achim von Arnim, 1781 ～ 1831）の長編小説「ドローレス伯爵夫人の貧と富と罪と贖い」（„Armut, Reichtum, Schuld und Buße der Gräfin Dolores“, 1810年刊）第二部「富」第八章～第九章の翻訳である。

翻訳にあたっては次の全集版を底本にした。

Achim von Arnim: Sämtliche Romane und Erzählungen, Erster Band. München (Carl Hanser Verlag) 1974.

なお、以下の版も参照した。

Achim von Arnim, Werke in sechs Bänden, Band I. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1989.

翻訳者両名は十数年来ドイツ・ロマン主義文学について共同研究を行っており、本編はその成果の一端である。訳出に際しては分担を行わず、山下と林が全編にわたって共訳を行った。今回はその第三回目である。なお、原文中の句読点やダッシュおよび対話形式は、意味を損なわない範囲で読み易く変えた部分があることを付け加えておく。

訳者：山下 剛（本学専任講師）・林 雄作（山形大学助教授）